

仏事を学ぶ 第十回



お経の意味⑦

今回は「仏法僧の三宝に帰依することが悟りを得る道であり、その実践として三聚浄戒、十重禁戒を受けて（受戒して）仏の位に入ることを説いている。」ことについて説かれている、修証義第三章「受戒入位」について学びましょう。

※僧Ⅱ（僧伽・サンガ） 仏教を信仰する仲間・指導者

【修証義第三章受戒入位原文】

次には深く仏法僧の三宝を敬い奉るべし、生を易え身を易えても三宝を供養し敬い奉らんことを願うべし、西天東土仏祖正伝する所は恭敬仏法僧なり。若し薄福少徳の衆生は三宝の名字猶お聞き奉らざるなり、何に況や帰依し奉ることを得んや、徒に所逼を怖れて山神鬼神等に帰依し、或は外道の制多に帰依すること勿れ。彼は其帰依に因りて衆苦を解脱すること無し、早く仏法僧の三宝に帰依し奉りて、衆苦を解脱するのみに非ず菩提を成就すべし。其帰依三宝とは正に浄信を専らにして、或は如来現在世にもあれ、或は如来滅後にもあれ、合掌し、低頭して口に唱えて云く南無帰依仏、南無帰依法、南無帰依僧、仏は是れ大師なるが故に帰依す。法は良薬なるが故に帰依す、僧は勝友なるが故に帰依す、何れの戒を受くるも必ず三帰を受けて其後諸戒を受くるなり、然あれば則ち三帰に依りて得戒あるなり。此帰依仏法僧の功德、必ず感応道交するとき成就するなり。設い天上人間地獄鬼畜なりと雖も已に帰依し奉るが如きは生生世世在在処処に増長し、必ず積功累徳し、阿耨多羅三藐三菩提を成就するなり、知るべし三帰の功德其れ最尊最上甚深不可思議なりということ、世尊已に証明します、衆生当に信受すべし。次には応に三聚浄戒を受け奉るべし、第一摂律儀戒、第二摂善法戒、第三摂衆

その三宝を信じるという事は、正しく、汚れ無き無我による信心になりきって、仏陀世尊（釈迦牟尼仏）がご在世の時でも、仏陀がお隠れになって会うことができなくなった時代でも、掌を合わせ、頭を下げて、口に唱えて申し上げるのです。『仏を抛り所にします。真実の教えを抛り所にします。信心の仲間と指導者を抛り所にします』と。仏とは偉大なる師（先生）だから抛り所にします。教えは優れた心の薬だから抛り所にします。仲間と指導者は何者より優れた友達だから抛り所にします。仏の弟子になるといふ事は、必ずこの三宝帰依によって成り立ちます。国や宗派や教えが違っても、入信の始めには必ずこの三宝をよりどころにすることを誓って、その後その宗派の教えによるきまりを誓うのです。ですからつまり、帰依三宝によって仏教徒としての資格が備わるのです。

この三宝を信じ抛り所にする功德は、私の無我と仏の智慧慈悲とが共鳴した時に完成するのです。たとえ、天上界、人間界、地獄界、餓鬼界、畜生界などの愚かさや苦しみの世界にいても、仏心と共鳴すれば必ずそこで信じる事ができるのです。すでに帰依することができた人は、いただいた命で、縁ある世界で、何時でも、どこでもその信心を育て、必ず徳を積み、この上なく正しい悟りを求める心を完成するのです。次のように心得なければなりません。三宝を抛り所にする功德は最も尊く、他の価値に比べられないこの上なきもので人知を越えた不思議な力を持っているということは、仏陀世尊がすでに実証しています。人々は必ず信じ頂くべきです。

次にはまさに、清浄心が集まる三つの慎みを頂かなければなりません。第一は人の道・仏の道を守ることを喜ぶ慎み、第二は善き事を喜ぶ慎み、第三は人の喜びを己が喜びとする慎みです。

次には十か条の大切な決まりを慎みの習慣として約束しなければなりません。第一、命あるものごとさらに殺すまい。第二、与え

生戒なり、次には応に十重禁戒を受け奉るべし、第一不殺生戒、第二不偷盜戒、第三不邪淫戒、第四不妄語戒、第五不酤酒戒、第六不説過戒、第七不自賛毀佗戒、第八不慳法財戒、第九不瞋恚戒、第十不謗三宝戒なり、上来三帰、三聚浄戒、十重禁戒、是れ諸仏の所持したまう所なり。受戒するが如きは、三世の諸仏の所証なる阿耨多羅三藐三菩提金剛不壊の仏果を証するなり、誰の智人か欣求せざらん、世尊明らかに一切衆生の為に示します、衆生仏戒を受くれば、即ち諸仏の位に入る、位大覺に同じうし已る、真に是れ諸仏の子なりと。諸仏の常に此中に住持たる、各々の方面に知覚を遺さず、群生の長えに此中に使用する、各々の知覚に方面露れず、是時十方法界の土地草木牆壁瓦礫皆仏事を作すを以て、其起す所の風水の利益に預る輩、皆甚妙不可思議の仏化に冥資せられて親き悟りを顕わす、是を無為の功德とす、是を無作の功德とす、是れ発菩提心なり。

【現代語訳】

つぎに、深く静かに仏と教えと信心の仲間の三つの宝を抛り所としてお任せすべきです。例えどこでどの様に生きようとも三つの宝を供養し、あこがれ、尊敬し続けられますように願うべきです。西天竺（インド）と東の中国と、仏と祖師方が間違はなく伝えてきたものは仏・法・僧を敬い抛り所にするという事でした。

もしも、私たちが信心の徳分に薄かったら三宝の名前さえ聞くことは出来なかつたでしょう。ましてや、三宝に帰依することはできなかつたに違いありません。唯むなしくたりをおそれて、山の神、鬼の神を拝み、さらには正しい仏教以外の靈廟を信じてはいけません。そのような人はその信仰で多くの死の苦しみを悩みを根本的に解放する事はできないでしょう。急いで仏・法・僧の三宝を抛り所にして、あらゆる苦しみから根本的に解放されるだけでなく、悟りへの道を成し遂げるべきです。

られざる物を手にすることあるまじ。第三、道ならざる愛欲を犯す事あるまじ。第四、偽りの言葉を口にする事あるまじ。第五、酒におぼれて生業を怠る事あるまじ。第六、他人の過ちと責め立てる事あるまじ。第七、己を誇り、他人を傷つける事あるまじ。第八、物でも心でも他に施す事を惜しむ事あるまじ。第九、いかりに燃えて自らを失う事あるまじ。第十、仏・法・僧の三宝をそしり、不信の念を起こす事あるまじ。以上のように帰依三宝、三つの浄らかな慎み、十の大切な決まり、これらはあらゆる仏が保ち維持してきたものです。

仏から誓いを頂くということは、過去・現在・未来の仏方が実証してきた正しい教えを喜び求める確かな悟りが備わるのです。いかなる人も智慧ある人は喜び求めるべきです。仏陀世尊はお経の中にハッキリと、全ての人の為に教えています。『人が仏との約束を頂けば、ただちに仏の世界に入っているのです。立場は仏陀と同じ世界なのです。本当にこのとき仏の子どもだと言い切れるのです』と。

全ての仏さま方は何時でもこの悟りの中に安住しているから、一々の働き・現象に人間的意識の跡が残っていないのです。様々な在り方の衆生も、永遠にこの清浄な空の安らぎの中に包まれて、それを活用して、しかも一々の働きの意識に、汚れた迷いの跡は出てこないのです。そのとき、全宇宙に広がる真理の世界に包まれて、いる土地も草木も垣根や壁も瓦や石ころに至るまで、全て仏の働きを生きているから、縁起という真理が起こすところの風や水の恵みをつけている生き物達は、皆人知を越えた不思議な仏の働きかけに、知らぬ間に助けられて、自ずから真理の悟りを実現しているのです。これを人間的意識以前の無心無我の功德といます。これを作為のない真実の働く功德といます。これこそ悟りを求める心を起こすという事です。